

「馬場塾の最新胃 X 線検査法」

馬場 保昌 編集
佐藤 清二
富樫 聖子 執筆
坂東 孝一
松本 史樹

横浜市立市民病院がん検診センター
日本消化器集団検診学会胃 X 線撮影法(間接・直接)標準化委員会委員長

今 村 清 子

“プロジェクト X—挑戦者達—”という NHK のドキュメント番組が高視聴率を得ていると聞く。不況の世の中になって初めて、さまざまな夢を成し遂げた無名の人々のドラマが人の心を打っているのかもしれない。また、感動の涙の後に、何か一つの目標に向かって力を結集させると、とてつもなく大きな成果が上がることを、人々が改めて認識したからであろうか。このたとえを借用させてもらうならば、今回、書評を依頼された「馬場塾の最新胃 X 線検査法」は 10 年間にわたって“最良の X 線写真を撮る”ことを一意専心のテーマとして挑戦し続けてきた馬場保昌という熱血漢の医師と、その指導のもとに馬場塾を支えてきた放射線技師達のプロジェクトが織り成す苦闘のドラマとも言える。

とにかく一読していただきたい。すくなくとも胃癌検診に一度でも携わったことのある医師、放射線技師の諸兄弟であれば、いたるところに

掲げられた早期胃癌の画像にくぎ付けになるであろう。間接撮影・直接撮影を問わず、これほどまでに良質な画像が描出可能になったプロジェクトの功績には頭が下がる思いがあるが、それも 40 年以上にわたる胃集検の歴史的背景を踏まえてのことであり、その記載を忘れていないことに対しても敬意を表する。しかし、現在普及しつつある高濃度・低粘性バリウムを使用した最新の撮影法は二重造影像を主体としたものであり、発見疾患のターゲットは早期癌あるいは、進行癌の中でより早期の段階のものである。X 線検査は進行癌を見逃さなければ良いとした時代は去り、“内視鏡に匹敵する”あるいは“内視鏡で見えるとは限らない”癌を発見する撮影方法の確立を迫られている。その目的を達成するために、2002 年春には消化器集団検診学会の新しい胃 X 線撮影法(間接・直接)の答申案が出される予定であるが、この本に紹介されている撮影

法はそのモデルの 1 つになるであろう。従来の充満像による辺縁の変化ではなく、微細な粘膜像の変化を捉える撮影法と読影法に慣れるためにも、病変の描出能の優れた写真に接する努力を怠ってはならない。また、撮影時の些細な注意やアドバイスも至るところに述べられている。そのきめの細かさにも驚かされる。

狭い胃の中であるが病変の病態は多彩である。現在、消化器診療の領域における内視鏡偏重は画像診断の目からみるとバランスを欠いた部分がかなりある。X 線画像の読影が未熟の状態での内視鏡診断は危険である。この優れた書物が出版されたことにより、消化管造影に対する偏見を払拭できる多くの読者が出ることを期待したい。

● B5 頁 228 図 23 写真 592
色図 1 表 26 2001 定価(本体
4,700 円+税) 送料実費

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)